

保善とともに歩んだ半生



——本日は、よろしくお願いします。

よろしくお願いします。

——千野先生は、本校の卒業生でもありますか。

昭和57年卒です。入学が昭和54年で。同期に英語科の山田政之先生もいらっしゃいます。

——入学の経緯などは。

保善高校の隣にタワーマンションが建っていますが、あの一帯は当時は国鉄の社宅でした。その一番保善寄りに住んでいたのです。だから過去の卒業生と比べても、私の家が一番保善に近い。

——陸上競技を始めたきっかけは何ですか。

中学のときはバスケットをやっていたのですが、途中で辞めてしまいました。そのため、高校ではどんなに辛くても部活動を3年間全うしようと思っていました。

保善高校では、当時ラグビーと体操が有名で、ただ体操は経験者でないと難しい。ラグビーも自宅から眺めているとキツそう（笑）。そういうわけで、高校では陸上競技を選ぶことにしました。

入学して入部してみると、今もですが校外で練習しているのです。原宿の織田フィールドというところで。学割が効かないので通勤定期を買って、織田フィールドまで通っていました。

——通学でなく、通勤定期なのですね？

ええ。学校が原宿にあるわけではないので。

——種目は、何をされていたのですか。

短距離をやっていたんですけど、中学校からの経験者ではないもので、保善高校は当時、東京都の中で総合優勝するような学校でしたから、2年生までは部内でもほぼ最下位でした。3年生になってからは、自分でも少し速くなったと思ったものの、やはり部内では最下位。3年生の大井ふ頭での試合では、選手としては出られなくて、リヤカーを引いてごみ拾いをしていました。

——その頃、陸上競技部は何人くらいだったのですか。

当時だと、短距離・長距離・投擲・跳躍あわせて約100人くらい。どれも強かったです。卜部先生（陸上競技部・長距離部門顧問）などは、東京都でも総合優勝するなど、大活躍していました。

——千野先生と卜部先生だと、どちらが先輩なのですか？

私が3年生のときに、卜部先生は1年生です。今ではすっかり立場が逆になっちゃって（笑）。

——教員として赴任したのは、どのようなきっかけで？

藤本先生（当時陸上部顧問・のちに校長）から、保善の教員になってはみないかと声をかけられたのです。私と卜部先生が呼ばれて、卜部先生は最初1年間は事務職員としての勤務でした。私も最初の年は専任講師で、次の年から教諭に昇任し、担任を持ちます。

「教えない」をモットーに

——OBであり、教員でもある観点から、保善高校を受けようというご家庭にひとことお願いします。

中学校の先生からも、保善は運動・スポーツというイメージが強いとよく伺いますが、文武両道の高校生活を送りたければ、ぜひ保善にと申し上げたいです。

——実際、特進クラスと陸上競技を両立させた、阿部君（現3年生）や角田君（平成22年卒）の例もあります。



私の指導方針は、「教えない」。あまり教えると、そのことしかできなくなってしまいます。中学生や保護者の方に対しても、「私はほとんど教えません」ということを述べています。

阿部君も自分で研究して、沖縄でのインターハイに出場するまでになりました。本当に素晴らしい。

——早稲田大学で、お父さんと一緒に校歌を歌うのが夢だそうです。

——「教えない」とはおっしゃいますが、結果を出しておられます。何か指導のコツはあるのでしょうか。

私自身は短距離で、投擲は自分がやっていたわけではないので、いろいろなところに指導を受けに連れて行きます。埼玉の練習会、今治の高校、日本大学、中京大学など。その蓄積はあるのかも知れません。人数も少人数なので。

むしろ自分でハンマーをやっていなかったから良かったとすらも思

います。自分の見聞きしたことを生徒に還元するというのがあるのですね。

——たとえばハンマー投げなどで、練習時間の多くを占めているのは何なのですか。

これは陸上競技全般についていえることなのですが、やはり走る事が基本です。

——ハンマー投げでも走る？

ハンマーの指導者なども、よくサークルの中を走れ、走るようにターンをせよ、と言いますね。それは跳躍も同様で、跳躍の技術的なことばかりをやると、スピードが落ちてくるなどあるようです。

保善では夏と秋の記録会で、投擲チームだけでリレーを組んで出場するのです。1人100メートルずつ、それが4人。彼らはそれを楽しみにしていますよ。

——ちなみに阿部君は？（編集部注・聞き手が阿部君の担任なので、気に入って仕方がない）

最下位ではなかったですね。短距離選手にも勝ったりしていました。

——最近体重が減ったと嘆いています。

引退して走ることを止めると、重さが単なる重量だけになっちゃうので、かえって動けないということはあるのでしょうか。

変わりゆく保善生を見守って

——他に印象に残っている生徒だと、誰がいますか。

担任した生徒だと、バスケットの鈴木達也選手（平成21年卒）。こっちを向いているのだけど逆側にパスをしたりだとか、必ずしも背が大きいわけではなかったけれど、あれは持って生まれた感覚ですね。あとは世界陸上にも出た小林雄一選手（平成20年卒）。彼は中学まではテニスをやっていたのだけれど、保善では陸上競技を始めました。1年生の夏の合宿を超えたくらいから力がついてきて、そのあとの国体予選で、小林選手が有力選手を抑えてトップになって、そこから陸上競技を本格的に頑張ろうということになったのだと思います。岡山での国体に出ましたが、ぎりぎり入賞で、それがくやしかったらしいのですね。2年生で大阪のインターハイに出たが、やはり8番でのぎりぎり入賞で、悔しくて、自分でどんどんトレーニングして、勉強して、3年生の佐賀のインターハイでは優勝しました。私はほとんど指導していない。自分でどんどん練習し、研究していきました。

——体育の先生として、いま保善高校の生徒を見ていて感じることなどはありますか。

昔に比べると、少したくましさは欠いてきている感じもありますね。昔はマラソン大会で10km以上走ったり、登山教室があったりですとか、自然が相手だと逃げられないですものね。そういうものは昨今は避ける風潮もあります。

だからできるだけ楽しさを求めながら、かつては授業の持久走で山手線1周28kmのうちのどこまで走れるか、なんてことも取り入れながらやったりもしました。

良い面でいうと、優しい生徒が多いと思います。昔に比べると素直さがある生徒が多いような気がします。昔は、中にはやらかしてしまう生徒もいますよね。今はおとなしいというか、素直な生徒が多いと感じています。

私は学年とかクラスは関係なく、気が付いたら知らない生徒でも声をかけるようにしているのです。3年生で消防士の学校を受けるらしい生徒がいて、いつもロープワークの練習などしているので、「それは消防の学校に入ってからでも間に合うよ」なんて声をかけることもありました。

(編集部注・他にも、千野先生の大学時代から保善高校に赴任するまでの話、沖縄修学旅行や、かつての中国修学旅行、九州修学旅行の話、教職員どうしの裏話など、興味深いお話が多岐にわたりましたが、スペースの都合で割愛いたします)



voice OBが語る保善の魅力

今回は、10月30日に行われた「特進OBセミナー」(特進クラス独自の行事)の話者を務めた辻駿(つじはやと)さん〔東京工業大学3年生〕と児玉達也(こだまたつや)さん〔中央大学3年生〕(どちらも平成29年卒)にお話を伺いました。聞き手:山田優教諭



保善で出会ったかけがえのない友

——今日は特進OBセミナーの話者を務めていただきありがとうございました。実は先ほどから気になっているのですが、児玉君は辻君のことを「辻さん」って呼ぶんですね…。

児玉（以下「児」） ええ、親しみと敬意をこめて。

——辻君は児玉君のことを何て読んでいるのですか？

辻 「児玉」です。（一同笑）

——在学中から仲の良い二人ですが、お互い相手をどう思っていますか？

児 辻さんは雲の上の存在。自分で考えて留学を決めて凄いなと（編集注：辻さんは高校1年生から2年生にかけてタスマニアに留学しています）。見習わないといけないと思っています。

辻 彼とは1年のころから仲がよかったです。学力とか関係なく、まわりが思っている以上に色々と考えている人。一見すると抜けているように見えるけど、実際そういうところもあります（笑）、中身がしっかりしています。だから、一緒にいてもつまらない。

児 ありがたきお言葉。

辻 彼は何でも一所懸命に取り組んでいた。マージャンなんかは本を読んで勉強していたし。

児 マージャン覚えてたで雀荘のバイト始めたりしてました。マージャンを通して色々なことを考えて、行動しました。分からなければ本を読んだり、人に尋ねたり。マージャンを勉強に置き換えると、マージャンが強くなっていく過程は勉強のそれととてもよく似てますね。試行錯誤していくあたりもそっくりだと思います。将来、勉強以外の何が役に立つかなんてわからないですが、僕にとってマージャンは物の判断やコミュニケーションの力を鍛えるのに結構役立ってます。

——そういえば二人とも在学中はよく質問してましたよね。

児 英語は小関先生、数学は細谷先生によく質問していました。

辻 僕は夕方遅くまで、ホームルームで担任の先生とよくしゃべりました。ほかの学校のことは分からないけれど、どうやら生徒は先生にほっとかれることが多いらしい。対応が冷たいと聞きます。

児 その点、保善は先生と生徒との距離が近い。保善以外の学校で、先生と勉強や業務のこと以外で話なんかしたことない。先生と冗談を言い合うなんて、最初は戸惑ったけど、すごく楽しい。先生方はとてもノリがいいです。

入学のきっかけは違うけれど…

——二人はそもそも、どんな経緯で保善高校に入学したのですか？

児 自分は単願推薦だったのでここしか受けていません。中学時代は野球ばかりしていて勉強していませんでした。それと男子校であったことも大きいです。男子校は楽しそうだなと思った。何というか、男子だらけの「ゆるさ」に惹かれました。女子は面倒くさい、というか男子だらけの方がきっと楽しいと思って。

辻 僕は絶望でした。受験に失敗してここに来たから。最初は来たくないと思いましたが、だんだんと気持ちが前向きに変わっていきました。大きな契機はやはり留学です。そもそもすべり止めであった高校に行くのが嫌で留学しました。留学先のタスマニアの学校は自分で探しました。この場所が良かったのは留学生が少ないこと。日本人同士でたむろするとかがなくてよかった。穴場でした。当初留学は消極的な理由でしたが、留学先では一人で考える時間がたくさんあり、だんだんと前向きになっていきました。

——「ライオンキング」のシンバみたいですね。

辻 追い出されたわけではないですけどね(笑)

——2年次に保善に戻ってきたわけですが、なじむのは大変でした？

辻 うーん、そんなに…。



児 クラスのみんなは自然体で彼を受け入れていました。みんなすぐ盛り上がれるし。今思うと多様性のある空間でした。それぞれの違いを受け入れられるクラスだった。優しい子が多かった。

——とにかく留学によって保善を受け入れられる準備ができた？

辻 自分の物の見方を変えました。入学当時は、保善の隣に某進学校があることもきつかった。こんなところにいるはずじゃなかった、という気持ちが強く、周りからどう見られているのかを気にしすぎていました。しかし考えていく中で、某進学校の彼らは本当に賢いのか？ これからの勉強で追いつけないような学力なのか？ って考えていくとあまり気にならなくなってきました。あと、単純に留学先でゆっくり、のんびり過ごしたことで気持ちが安らいだというのもあります。細かい事柄の積み重ねによっての変化だと思います。

自分で考える 自分の言葉をもつ

——昔、辻君は「クラスは少人数の方がいい」と言っていました、

その点、児玉君はどう思いますか？

児 少人数の方が意見を言いやすい環境になると思います。それにその方が自分で考えて行動する。今日のOBセミナーの発表でも、辻さんのスライドに「考えて行動する」が出てましたね。

辻 進学校を出たからといって考えて行動できるわけじゃないことを、大学に入学して知りました。本当にみんな「考えて行動」できない。例えば先輩からレポートをもらって、それをもとに書いている大学生も多い。そういう人が大学にはたくさんいる。そういう人は中身がないので、話をしているても話題が広がらずにつまらない。

——自分の言葉を持たない人は、確かに会話をしていてもつまらないよね。その点児玉君は自分の言葉の塊ですよ。あなたの今日のプレゼンテーションはとても面白かったです。

児 いや～(照)。でも日ごろ何も考えていない人にいきなりプレゼンをしろと言われてもできないですよ。例えば、大学では、事前にテーマを与えられて、自分で考えてから授業に参加しないといけない授業がたくさんある。でも考えることをしていないと、その授業がいくら少人数でも何もできない。

辻 僕は保善の卒業文集にバランスが大事だと書いたのですが、今でもそう思っています。どういうことかということ、知識は少ないのも問題だが、多すぎるのも考え物だと思うのです。なぜ多すぎるとダメかというと、仕事をしていく上で、どんな仕事でも「ユニークさ」が必要になります。商売でも研究でも。多すぎる知識はそれをつぶしてしまいます。知っていることに自分の思考が知らないうちに引っ張られてしまう。それから離れるのはとても難しい。だから知識の量はバランスがとても大事だと思うのです。

児 話が少しそれてしまいますが、僕は以前、速読教室に参加したことがあって、そこの先生が、ただたくさん速読をする、本を消費することは得られるものが少ないとおっしゃっていました。

——「速読」の先生なのに？(笑)

児 ええ。どうやら速読して読むスピードを上げるだけでなく、読み終わった後に自分で本の内容をまとめてアウトプットしたりとか、そういう一歩踏み込んだ読書をしないとだめだって。読書は消費ではなく投資だって。だから、辻さんの話を聞いて、闇雲に何冊も読むのではなく、バランスが大事なんだなって思いました。

——ところで二人とも在学中は「調理同好会」でしたね。きっかけは何だったのですか？

児 すでに友人が入部して、彼から「今度昼食会があるから体験に来ない？」と誘われました。試しに参加すると楽しかったので毎月行くようになりました。

辻 僕は見玉が入部したので入りました。特進は授業が7限までであったり、調理室までの道のりも長かったので、放課後家庭科室に行くと、たいていすでに料理ができていました。

——調理同好会の生徒は進学実績が良い傾向がある気がしますが、どうですかね？ 調理というのは段取りが大切、そういう思考が勉強にも活きたりするとか…？

辻 自分たちは3年から参加したので、先輩のことはよく分かりません。偶然じゃないですか…。

児 そういえば他の部員も大学に合格していました。部活の活動での息抜きが、ほかの活動の活力になったのかも。部活に入ったことで、高校生活にアクセントが付いたのは確かです。

——では最後に、保善高校を受験しようとしている皆さんへ一言。

児 特進クラスのことしかわかりませんが…。みんなそれぞれに居場所があって、いろんな人たちが共生できる、分かり合える、自分が自然体でいられること、それが保善に入って本当に良かったと思うことです。先生との距離も近いし、気軽に相談できる環境があります。自分と雰囲気合う人がきっといるだろうし、いろんな人がいて、それを認めてくれる人がいる。そういう点では自由な校風があると思います。ぜひ！

辻 僕も特進のことしか語れませんが、やはり特進だったら少人数の教育が受けられることでしょうか。教育は究極的には個別が一番良いと思います。もちろんこれは現実的ではないが、少しでもそれに近い形、保善の特進はそれに近い環境があると思います。これまでの学校生活を振り返ってみると、例えば三者面談は適当で義務的なものが多かった。保善以外で先生と個人的な話をした覚えがないです。そういう意味で保善は、大人と話せる機会が多い。話せる大人がいっぱいいるということは大きな利点の一つだと思います。同級生としゃべるのも悪くはないですが、自分の知らないことを知っている人としゃべることは大切です。そういうものが保善にはあります。

児 同感です。

——本日はOBセミナーに引き続きインタビューにも応えてくれてありがとうございました。



「芸術は爆発だ」

すごくインパクトのある言葉ですが、これは1981年に放送されていたCMで芸術家の岡本太郎氏が言っていた有名な言葉です。1986年の流行語大賞にも選ばれたくらい一世を風靡した言葉で、岡本太郎氏もこのCMで一躍時の人となり多くのテレビ番組に出演し、芸術に興味のない人たちもその存在を知ることになりました。

岡本太郎氏と聞いてピンとこない人も、岡本太郎氏が制作した1970年大阪万博のモニュメント【太陽の塔】や井の頭線渋谷駅からJR渋谷駅を繋ぐ連絡通路に設置してある壁画【明日の神話】といえは知っている人もいるかもしれません。しかし当時中学生の私は野球に夢中で岡本太郎氏を知る由もなく、このCMも変な人が目を見開いた表情で叫んでいるという事だけが強烈に記憶に残っていて、同じ世代の人たちも含め芸術家というより「変わったおじさん」というイメージの方が強かったと思います。当時の私にとって芸術は「何だか良く分からないもの」「高尚（上品）なもの」「難しいもの」だったのが、このCMで更に「？」となりました。でも岡本太郎氏という存在と「芸術は爆発だ」という言葉は以降忘れることはないほど強烈なインパクトを私に刻み込みました。

美術の授業で生徒から「芸術は良くわからない」という声を耳にします。また「芸術家は変わり者が多い」というのも良く聞きます。そもそも「何で高校の授業で芸術があるの？受験に関係ないのに」なんてことも。中学生の時の私のように普段の生活の中で芸術に触れる機会がない、生活していく中で必要がない、と思っている人の方が多いのかもしれません。

普段の生活で芸術に触れる機会のない人でもパブロ・ピカソは知っているでしょう。中学校の社会や美術の授業でも良く紹介される「ゲルニカ」を制作したスペインの作家です。一見子供の落書きのように見える作品を「キュビズム」と言っていますが、その作品が「〇〇〇億円で落札されました！」とニュースで紹介されるように、亡くなってから40年以上経ちますが世界で一番知られている芸術家と言えます。自分にも描けるような作品が何億円もするの？と驚かれるくらい「わからない」芸術の代表がピカソの「キュビズム」と呼ばれる作品群ではないでしょうか。

また日本で人気のある画家ヴィンセント・ファン・ゴッホも良く知られていますが、色鮮やかな色彩と激しいタッチ（筆遣い）といった作風より、耳を自ら切って知人に渡そうとした「耳切り事件」や生涯売れた作品は1枚だけ、など伝記や映画などで描かれた多くのエピソードの方が知られていると思います。ゴッホが日本で人気なのは正にこうしたエピソードから「狂気の画家」と呼ばれるゴッホの人間性と人生がドラマティックだったのが大きな要因だと思います。芸術家は

変わっている、画家は普通の人ではなれないというイメージが強くなったのはゴッホの存在が大きいといえるでしょう。

芸術作品は「わからない」芸術家は「変わった人」というイメージがますます芸術を普段の生活から遠ざけてしまっていますようですが、では何故人は絵を描いたり音楽を奏でたりするのでしょうか。またそれをなぜ鑑賞したいと思うのでしょうか。

「人間は考える葦」だとフランスの思想家パスカルが言ったように人間は自然の一部ではあるけど思考する生物です。そして人それぞれの違い「個性」を認識することが出来るのも人間という生物です。個人の違いを認識した他人同士が社会で共生するためにはコミュニケーションが必要となりますが、個人の意思や考えを相手に伝える手段として言葉があります。でも言葉で伝えられないものもあります。そんな考え、感動、心のありようを相手に伝える手段として色や形、音を使って表現するのが芸術と言われています。少し難しくなりましたが芸術は生活する上で絶対に必要なものではないものだけど、人間にしか必要のないものといえるのではないのでしょうか。

岡本太郎氏は自身の著書「今日の芸術」で、「芸術は、ちょうど毎日の食べものと同じように、人間の生命にとって欠くことのできない、絶対的必要物、むしろ生きる事そのものだ」と言っています。

また、冒頭の「芸術は爆発だ」という言葉は、「人間として最も強烈に生きるもの、無条件に生命を突き出し爆発する、その生き方こそが芸術なのだ。そして、人生は本来、瞬間瞬間に、無償、無目的に爆発し続けるべきだ。いのちの本当の在り方だ」という思いから出た言葉でした。爆発とは破壊すること、破壊とは挑戦することです。普通や当たり前なんてない、つまり生きるとは常に新しいことにチャレンジすることだと言っているのです。

芸術は「わからないもの」「難解なもの」かもしれません。でも人間だからこそ芸術は生まれるし、人間だからこそ芸術は必要とされます。「わからないもの」「難解なもの」に挑戦する、これが人間らしい生き方だと芸術家は揃って言います。ピカソもゴッホもまた常に新しい表現を模索し続けた芸術家だったからこそ今なお評価され続けているのです。

長い人生の中でじっくり芸術に触れる時間は学校の授業でしか味わえないかもしれません。是非、「わからない」「難しい」にひるむことなく芸術の授業に参加してみてください。



〔くろべみのる／芸術科教諭〕